

35 節にゼベダイの息子ヤコブとヨハネが登場します。この兄弟はペトロと共に 12 人の弟子たちの中でもイエスに特に近い者として描かれています。二人の願いは終末の時に弟子たちの中でも最高の地位に就かせてほしい、というものです。この福音書を最後まで読めば、彼らの願いは他の人、すなわち、イエスの十字架刑では二人の強盗によって実現されたことがわかります。彼らはイエスの自分と同じ苦しみと死を引き受けることができるかという問いかけに、「できます」と答えています。しかし、イエスは彼らの願いを自ら決めることはできず、神さまによって決められることだと答えることで、間接的に退けています。41 節の他の弟子たちの彼らに対する怒りは他の弟子たちも同じことに関心を寄せていたことを表しています。イエスは弟子たちに、支配者たち、偉い人たちが人々が自分の奴隷になるように望んでいるのとは、まるで正反対の生き方、皆に仕える者になり、全ての人々の僕、文字通りには、奴隷になりなさい、と勧めています(42~45 節)。「仕える」は、人のために働くことを表す言葉であり、

45 節はこの福音書の中で最も明確にイエスの使命と死の意味が語られている箇所です。イエスが来たのは仕えるためでした。このことはイエスの受難に向かう歩みだけでなく、イエスの歩み全体を貫く姿勢を表しています。ここでは、イエスの死が多くの人々の身代金であったと言われています。身代金とは、本来は人質や奴隷を解放するために支払う代金のことです。イエスの死を多くの人々の身代金とみなすのは、福音書ではこの箇所と並行箇所マタイ 20:28 だけです。イエスの死を贖罪死とみなす考え方は著者の時代、あるいはそれ以前の時代に広く採用されていました。著者はイエスの生き方全体から死だけを切り離して、そこに意味があるというのではなく、イエスの死を仕えるというイエスの生き方の頂点として示しているのです。

著者はイエスの生涯、イエスの行いやイエスの言葉、を福音として福音書という形で伝えたのです。イエスを信頼し、従うあなたがたは、いたずらに上昇志向に明け暮れることなく、イエスの苦難にあずかり、支配者の権力下にあつて、彼らのごとく大いなる者ではなく、万人に仕える者に、彼らのような第一人者ではなく、万人の奴隷となるように、ということがヤコブとヨハネの願いに対する応答によせた、著者の記すイエスのメッセージではないかと思うのです。私たちはこのイエスの言葉をどのように生きることができるのでしょうか。受難節を過ごす時、このことを自らに問いかける時でもあるのです。